

音楽文化創造学科教授 田中 範康

1. 研究活動

■作品発表			
Sparkling in the Space VI —エレキギターとエレクト ロニクスのための— (初演)	2015. 6	主催：ニンフェアール 第11回公演 会場：5/R Hall&Gallery ホール	本作品は、エレキギターの音を、様々なアプ リケーションによって変調、加工された音素 材とエレキの生演奏とのコラボレーションに よる音像制作を試みた。2章で書かれた本作 品は、1章では清楚な音色のパレットを表現 し、2章ではノイジーなハードな音楽を目指 した。音楽構築において、動機操作によって 全曲を作り上げた。演奏はElectric Guitar 佐 藤紀雄 演奏時間約12分

そよ風 (初演)	2015. 11	主催：日口音楽家協会 会場：カワイ表参道パウゼ	すでに、巨匠と言われる作曲家が音楽にした詩を使って、新たな作品を作ること自体おこがましいことなのだが、とにかく自分なりに詩を読み込み、そしてそこから感じられるイメージを極力素直に音にしてみた。本作品は、歌曲というよりは、ソプラノとピアノが対等な存在であるアンサンブル作品である。 Sop. 川畑久子 演奏時間約9分
一つの事象 —オーボエとピアノのための— (初演)	2015. 11	主催：Inexplicable owl 第2回公演 会場：Menicon ANNEX HITOMIホール	オーボエは、2枚リードの楽器の宿命とも言えるディナーミックのコントロールが大変難しく、作曲家泣かせの楽器の一つである。しかし過去より現代に至る迄その魅惑的な音色に惹かれて、多くの名曲が存在する。本作品は、特殊奏法に依拠する事無く、2つの楽器のアンサンブルの中で培われる楽器の本来的な響きに着目し、静寂の中にも印象派の絵を想起させるような、響きの輝きを求めた。演奏は、Ob. 安原太武郎 Pf. 山内教子 演奏時間約10分
「無言歌」 —フルートとギターのための— (初演)	2015. 11	主催：日本現代音楽協会 (現音・秋の音楽展) アンデパンダン展 会場：東京オペラシティリーサイタルホール	2つの楽器が、冒頭に提示された複数のテーマをもとに対峙、融合を繰り返しながら全曲を構成している作品である。冒頭のテーマは、音列技法のように厳格ではないが、一部その考え方を取り入れた方法で作られている。本作品名の「無言歌」は、具象的なイメージではなく、多様な音像による色彩的な響きから、聴き手が様々な事象を連想するという事で付けた曲名である。演奏は、Fl. 木ノ脇道元 Guitar 佐藤紀雄 演奏時間約9分30秒
■論文			
和声学における実践的教育 のための一考察	2016. 1	名古屋芸術大学教職センター紀要第3号 (総頁数17頁)	和声学に代表される音楽基礎理論科目(和声学、楽曲分析、作曲法等)では、特に将来教員を目指す学生にとって、実際の教育現場で応用出来る能力を養う事が、最終的な教育目的である。そこで本稿では、従来の四声体書法の学びが中心であった狭い概念での教育方法に加え、音楽基礎理論の上位科目である、作曲法、あるいは楽曲分析へのアプローチ科目の性格をもたせるための実践的な教育方法の可能性について論じたものである。
エレクトロニクス技術、特に電子音が音楽作品に及ぼした影響について～作曲家の立場から～	2016. 3	名古屋芸術大学研究紀要第37巻 (総頁数17頁)	古典派からロマン派までの作曲技法が、20世紀前半の無調音楽への流れ、さらに、エレクトロニクスの発達に伴う電子音の登場などにより、大きく変化したのである。そこで本稿では、特に、電子音を使った音楽が、現在に至迄、どのように作曲技法に影響を及ぼしてきたのかを自らの作曲活動の経験に照らし合わせながら論じたものである。また、今後、電子音の存在が、音楽文化のあり方や、作曲技法がどのように変遷していくのかも、合わせて述べている。

作曲法の基礎を学ぶために	2016. 3	名古屋芸術大学教職センター紀要第4号 (総頁数15頁)	教育現場で、指導者が求められる能力の一つとして、作曲、編曲は様々な面で必要とされる。そこで本稿では、筆者が取り組んでいる和声学と作曲法との実践的、且つ一元的な教育方法を基軸に、特に動機書法に焦点を合わせ、中、高の教育現場で応用できる作曲法の教育方法について論じたものである。加えて生徒達の音楽創作において、適切な指導方法につながる内容についても述べている。
■著書			
和音分析の基礎	2015. 12	㈱オブラパブリケーション (総頁数48頁)	和声学では、その基本である四声体書法に加えて、和音進行における響きの変化、特性を理論、感性両面で受け取れる能力を学ぶ必要がある。このことで、実際の音楽において、和声の流れが音楽に及ぼす影響を客観的に理解する能力が養われるのである。そこで本書では、和音分析を通じて早い時期から非和声音を導入し、和声学における理論的理解と実践的理解の融合を目指したのである。 共著者：岩本渡

2. 教育活動（教育実践上の主な業績） 大学院授業担当 ■有 □無

授業科目名 作曲法研究Ⅳ		本学の学生は、入学時点において、ソルフェージュ、基礎理論科目などの習熟度が低いといわざるを得ない。これらの学生を教育する為には、グレード制の徹底、教育プログラムの現実的対応等を考えてカリキュラムを構築していかなくてはならない。また、理論科目では従来のアカデミックな教育内容に加え、今に生きる学生達の趣向する音楽の内容を加える事で、音楽の基礎的な理論全般に興味をもたせることが必要と考えている。ジャンルに拘らない多様な音楽の理論的理解を深める事が、スキルアップに直接つながると考えている。
◆前期 ◆後期		
工夫の概要	教材・資料等の概要	
作曲理論コース4年次の専門科目である。特に無調音楽を中心に指導するが、作品を仕上げるために必要な様々な知識の習得のために、20世紀から、現在にいたる代表的な音楽作品について、主に音楽構造に視点をあてて説明を加えていく。	現代作品のスコア・CD	
授業科目名 対位法		
◆前期 ◆後期		
工夫の概要	教材・資料等の概要	
対位法の基本である声部様式を学ぶ。本科目は演奏学科の学生が対象者である。そのために、対位法音楽の理解を短時間で取得させるために、前期は厳格対位法（2声のみ）後期は2声のインベンションの創作を中心とした授業を展開していく。厳格対位法では、様々な規則について、その必然と歴史的な変遷についても述べる。また、インベンションについては、こちらで和音進行などを定めることにより創作上の負担を軽減することで、より学習効果が上がるよう配慮した。	ホセ・イグナチオ テホン「パレストリーナ様式による対位法」 バッハのインベンション、パレストリーナ作品の楽譜	

授業科目名 音楽制作実習Ⅱ	
◆前期 ◆後期	
工夫の概要	教材・資料等の概要
本科目での履修学生は、多様な音楽を趣向する学生が中心である為に、あえてジャンルの指定、並びに楽器編成を固定しない。ただし、出来る限り電子音などを使った作品の構築を指導し、同時に映像とのコラボレーションによる立体的音響空間の構築を目指すことが可能になるように、各ジャンルの教員による複数教員指導体制を工夫した。	各種音源・MaxMsp. その他の電子デバイス
授業科目名 作曲法研究Ⅲ	
◆前期 ◆後期	
工夫の概要	教材・資料等の概要
本科目では、個々の学生の能力に合わせて、作曲理論の不足部分をおぎないながら、並行して、無調音楽の理論的理解のために、様々な現代の作品を紹介していった。これを基に多様のスタイルによる断片的作品を書かせることを行い、その結果作曲の基本テクニックに上達が見られた。	現代作品のスコア・CD
授業科目名 和声学Ⅱ	
◆前期 ◆後期	
工夫の概要	教材・資料等の概要
本科目では、すでに和声学Ⅰで学んだ内容に加え、ドミナント和音の発展的理解、借用和音による一時的転調、確定転調なども学んでいく。さらに、サブドミナントの四和音も加えていく。後期の後半では、ソプラノ課題やソプラノ・バスの混合課題の実施をしていく。このとき、ドミナント定型、終始定式を理解させることで、和音設定が比較的容易に理解でき教育効果があがるよう、配慮した。	和声学1 本学発行の課題集
授業科目名 和声特論	
◆前期 ◆後期	
工夫の概要	教材・資料等の概要
シャランの380課題の中から、Sop. Bassを指定した外声課題で実施し、特に7の和音について正しい理解ができることに重点をおいて授業を進めた。また自分で実施した課題を必ずピアノで弾くことを指導したことで、旋法的な響きをかいま見るフランス和声の響きの流れを感じ取れるようになっていった。	シャラン380課題

3. 学会等および社会における主な活動

ヤマハグレード試験 3, 4, 5 級	2015. 4. 1～2016. 3. 31	現在に至る	試験官
日本作曲家協議会	2015. 4. 1～2016. 3. 31	現在に至る	会員
日本現代音楽協会	2015. 4. 1～2016. 3. 31	現在に至る	会員
日口音楽家協会	2015. 4. 1～2016. 3. 31	現在に至る	会員